

第 18 回研究会「ため池の利活用に関する〈水土の知〉」 総括討論

コーディネーター 広瀬 伸*

1. 基点としての谷

今回の研究会は、谷に設けられたため池を巡る、農業生産を中心とした〈知〉に着目するものである。

谷に棲むこと、つまり「山裾で山を背負う、谷筋を中心とする小世界」は、わが国の定住生活の基点といわれている（香月洋一郎『景観のなかの暮らし』など）。縄文期の遺跡立地はもとより、谷の開発については『常陸国風土記』行方郡の段の説話がある。角を生やした蛇身の夜刀神の抵抗に対して、先の時代には彼らを祀り上げて神と人間の領域を棲み分けたが、時代が下れば谷頭に池を築き、「此の池を修めしむるは、要は「民」を活かすに在り」（『風土記』上、角川ソフィア文庫版による）、人間のために退けと宣言して追い払う。

「夜刀」は「谷戸」や「谷津」、「谷地」と同義で谷の自然を象徴し、池を造り水田に開発して谷を占有するという行為が、《人間による自然の克服》の象徴となっている。

中世には荘園が展開し、武士の台頭を支えていく。早損や逆に洪水などで多分に不安定さを免れなかった平野部の荘園に対して、各地の在地領主が拓く荘園の多くはこうした谷を拓いた水田（谷津田）を基盤としていた。本部会の第 5 回研究会で話題となった陸奥国骨寺村や、他にも和泉国日根荘など各所に残る荘園絵図に当時の姿が描かれる。そのような荘園景観は、骨寺村や日根荘とともに、今回報告の国東半島に属する豊後国田染荘（第 4 回研究会で言及）でも「重要文化的景観」として保全されている。中世以来の景観が現代まで継承され、生活の「基点としての谷」の強靱な持続性を示すのである。

2. 生存基盤としての谷の豊かさ

「山裾で山を背負う、谷筋を中心とする小世界」はなぜ強いのか。

水田農耕の展開に連れて、狩猟・採集や焼畑の場であった林野は、水田の水源や肥料源にもなり、人々の居住点である集落と周囲の耕地、さらにはその外側の林野という異なる用途に使われる土地が、農業生産のために結びつけられる。それぞれの地目が、生産・再生産の過程に繰り込まれて緊密な関係を保った構造（ムラーノラーヤマの圏構造）をつくり出す。国土の形成とは、こうした構造をつくり出し拡大していくことであった。

この構造の中で、谷という領域は平地と山という地形の境界であり、人手が加わった地目の境界となり、それゆえ異なる生態系の境界ともなる。さまざま異なる生態系の存在は、そのそれぞれに対応した生存のための営為を可能とする。谷の《境界性》は環境利用、とりわけ生業の選択肢や可能性を増やし、豊かさを担保してきたのである。唱歌の「ウサギ追いし かの山／コブナ釣りし かの川」とは、児童の枠を超えて、さまざまな生態系に応じた生業を併せ持つこと、すなわちマイナー・サブシステム＝遊び仕事を含む多様な「生業複合」によって、水田農耕を中心としつつも生存の基盤を確固なものにしていった

* 水土文化研究部会 SUIDO-culture Research Group

キーワード：ため池、水管理、協働知、生態系保全、農村景観

ことの表象ともいえよう。

そこでは自然は生の自然ではなく、「加工された自然」であり、生産ならびに保全をも含んだ人間労働の集中的かつ持続的な投下によってはじめて形成され持続される。その際、〈人〉は集団で行動しなければならない。人と人との間にはコンフリクト、対立や妥協が出てこざるをえず、協働して事に当たるために、組織や振舞い方の作法（仕法）が生まれ、それらを統べるルールが育っていく。生産・生活とは異なった精神性の次元で、祭りや信仰、迷信など儀礼も付随する。

ため池を擁する谷は、このようなさまざまなモノ／コトが出合い作用し合う場として存在する。農業生産とその土地利用を中心に、出合うモノ／コトがつながり、〈系〉をなしている。〈系〉をなしつながるモノ／コトの総体が景観をつくり上げる。

「水土文化」というとらえ方は、そこにある要素を個別に見るのではなく、つながり、作用し合う〈系〉としてとらえることなのである。

3. 事例地域に即して

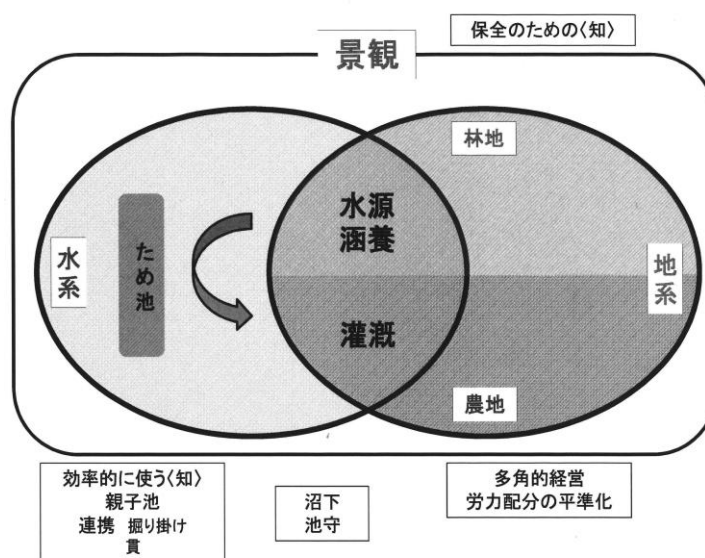
今回の2事例地域からの報告は、農業というシステムを支えるため池を焦点にしている。いずれの地域でも、概念的には水系と地系が下図のような構造を形成しており、その中心にため池があることによって生産を持続させ景観を維持している。

世界農業遺産に認定された「クヌギ林とため池がつなぐ農林水産循環」は、谷の持つ《境界性》の豊かさを体現した典型的な事例といえる。ため池は、集水路（掘り掛け）やトンネル（貫）で連携され、「池守」に代表される組織が管理する。池の連携という運用は、分水界を超えるも集落単位に完結する水の融通や、そうした流域変更の代償に七島藪の干場の権利を与える慣行などを生んだ。また、背負った山にクヌギを植え、資材を採取（薪炭からシイタケ原木へ転換）する営みは、適切な植生の維持保全にも資するものである。

「比企丘陵の谷津沼農業」は、谷頭のため池により維持されてきた。それぞれの池は原則として池単位で完結する「沼下」により維持管理されているが、渇水時には「沼下」が連携・協力し合う。また、沼水を守るための里山管理も共同で行われてきた。

これらの地域では、池や用水の操作運用にそれぞれ特有の形を有する一方で、共通点として、協働作業である池の造成など共同の記憶を芸能や祭礼で伝承していること、水の循環を基軸とした、希少種を含む貴重な生態系を擁することが挙げられる。

こうして「ため池を巡る〈水土の知〉」は、谷から背負った山まで、互いにつながり連動する組織的な“しかけ”として作動している。



ため池を巡る〈水土の知〉